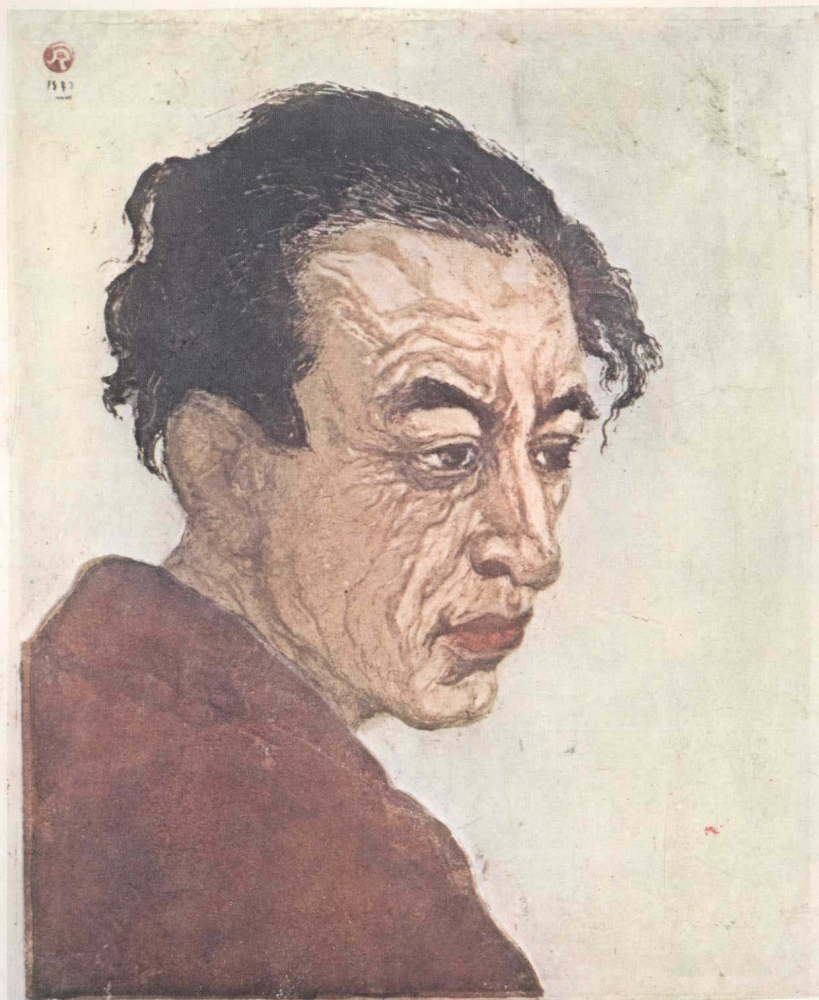


文芸読本

萩原朔太郎



文芸読本 萩原朔太郎 ©1976

初版発行 昭和五十一年六月三十日
三版発行 昭和五十二年八月十五日

定価 六八〇円

0091-037623-0961

落丁本乱丁本はお取りかえいたします

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

〒102 東京都新宿区住吉町九五

電話 東京(三三五) 五三一

振替 東京〇一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社



文 701679767

205071



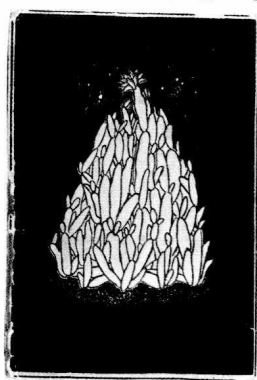
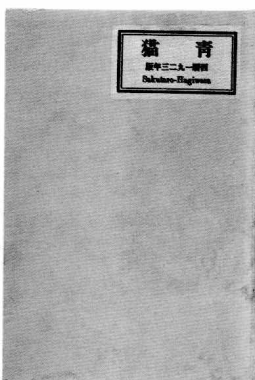
萩原朔太郎アルバム



『月に吠える』挿画(田中恭吉画)

本

『月に吠える』





幼年のころ



小学校時代



マンドリン・クラブのころ



右、前橋中学校時代
下、熊本第五高等学校のころ



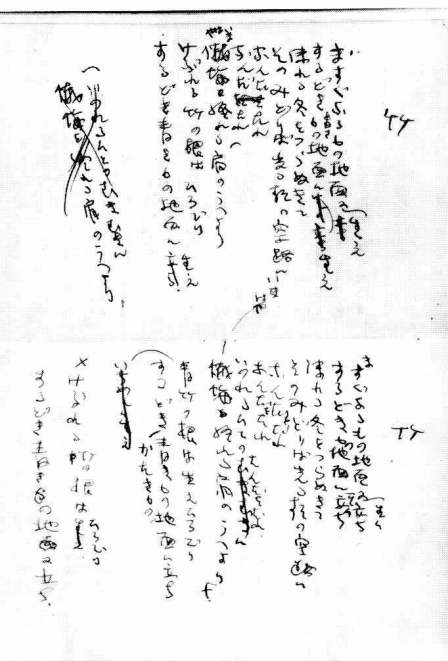


大正4年、北原白秋(右)と



演奏会の指揮者として

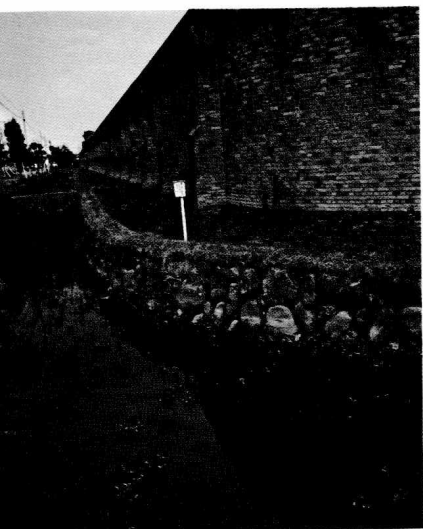
前橋にて。下、『月に吠える』草稿



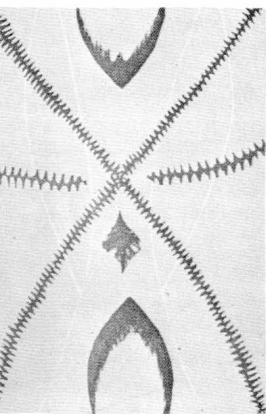
右より父、朔太郎、母、長女葉子を抱いた稲子、左端妹



二子山附近
前橋刑務所

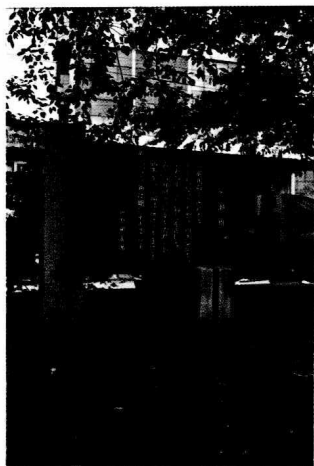


新前橋駅



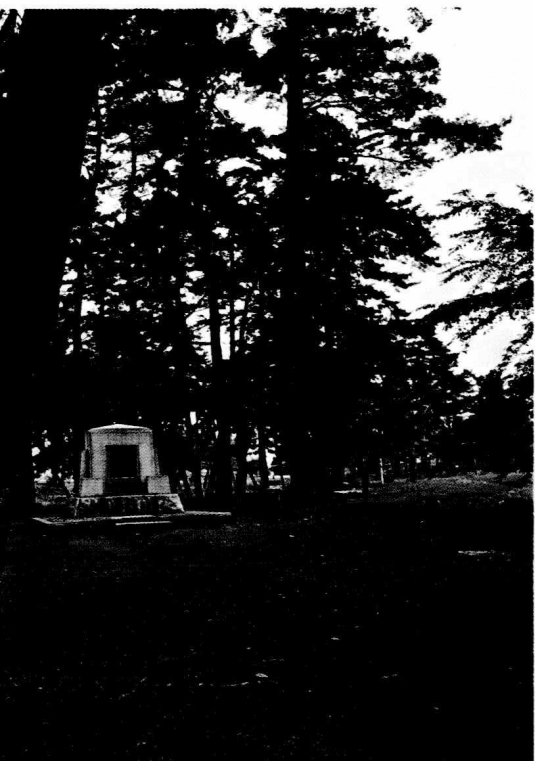
利根川岸から大渡橋を望む
『月に吠える』挿画（恩地孝四郎画）





広瀬川(左)と詩碑

詩人の家郷
「郷土望景詩」



敷島公園内の詩碑(左)と
萩原朔太郎記念館(生家土蔵)





上、下ともに晩年の朔太郎。世田谷代田の家で





昭和13年ころ、室生犀星(左)と
下、晩年の朔太郎



世田谷代田の家



朔太郎生家書齋内部

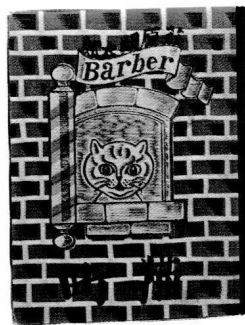


朔太郎生家
離れ座敷

朔太郎愛用の品



萩原朔太郎像(高田博厚制作)



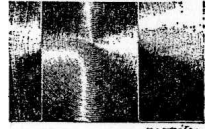
初版本

文芸読本

萩原朔太郎



河出書房新社



三 好 達 治

幽愁の鬱塊

懷疑と厭世との 思索と彷徨との

あなたのあの懐かしい人格は

なま温かい熔岩^{ラヴァ}のやうな

不思議な音楽そのまゝの不朽の凝晶体

あああの灰色の誰人の手にも捉へるすべのない影

ああ実に あなたはその影のように飄々乎として

いつもうらぶれた淋しい裏町の小路をゆかれる

あなたはいつもいつもあなたのその人格の解きほごしのやうなまどはし深

い音楽に聴き耽りながら

ああその幻聴のやうな一つの音楽を心に拍子とりながら

あなたはまた時として孤独者の突拍子もない思ひつきと諧謔にみち溢れて

——酔つ払つて

灯ともし頃の遽だしい自転車が行きすがふ間をゆかれる

ああそのあなたの心理風景を想像してみる者もない

都会の雑沓の中にまぎれて

(文学者どもの中にまぎれてさ)

あなたはまるで脱獄囚のやうに 或はまた彼を追跡する密偵のやうに

恐怖し 戦慄し 緊張し 推理し 幻想し 錯覚し

飄々乎として影のやうに裏町をゆかれる

いはばあなたは一人の無頼漢 宿なし

旅行嫌ひの漂泊者

夢遊病者^{ソムニビュール}

師よ 萩原朔太郎

零の零

そしてあなたはこの聖代に実に地上に存在した無二の詩人
かけがへのない 二人目のない唯一最上の詩人でした

あなたばかりが人生を ただそのままにまつ直ぐに 混ぜものなしに
歌ひ上げる

作文屋どもの掛け値のない そのままの値段で歌ひ上げる
不思議な言葉を 不思議な技術を 不思議な智慧をもつてゐた

あなたは詩語のコンパスで あなたの航海地図の上に
精密な 貴重な 生彩ある人生の最近似値を われらのアメリカ大陸を

発見した

あなたこそはまさしく詩界のコロンブス

あなたの前で喰せ物の臆面もない木偶どもが

お弟子を集めて横行する（これが世間といふものだ

文人墨客 蚤の市 出性の知れた奴はない）

黒いリボンに飾られた 先夜はあなたの写真の前でしばらく涙が流れたが

思ふにあなたの人生は 夜天をつたふ星のやうに

単純に 率直に

高く 遙かに

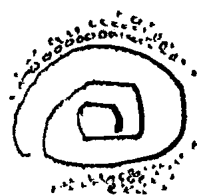
燦爛として

われらの頭上を飛び過ぎた

師よ

誰があなたの孤独を嘆くか

朔太郎管見



寺田透

僕は朔太郎が好きでなかった。好きになろうと思っていたが、やはり好きでなかった。十代の末から二十代のはじめにかけてのことだ。

犀星の方が好きであった。かれの詩の方がイマージュに現実性があつて、歌わんとする心情の筋も明確であり、詩篇全体が透徹していた。それには自分自身に言いきかせるあけすけな口調があつた。氣取つて自分の心持の姿をアイマイにするようなことがなかった。ハイカラがつたデカダンスはなく、手織りの紬をきて坐っているような具合であつた。

しかしそのうち、まるで有刺鉄線をもつて装幀したような、いらいと乾燥し、硬い感じの、まるで遠い荒蕪地帯から送られて来た遺品でもありそうな『氷島』が発刊された。この詩集は勢いはげしく僕を貫いた。杉浦明平や立原道造のようなそれまでもよく萩原朔太郎に通じたものたちはここに涸渇と焦燥をみとめ、これを朔太郎の衰頹の証拠としたと覺えているが、(かれらは山村暮鳥を愛し

ていた。)僕には、朔太郎は、この詩集においてもっとも僕の身近く迫つたように感じたものである。

日は断崖の上に登り
憂ひは陸橋の下を低く歩めり。
無限に遠き空の彼方
輝ける鉄路の柵の背後に
一つの寂しき影は漂ふ

今でもそう読んで行くと、僕の眼前には、本郷菊坂の杉浦の下宿の一間にさしこむ赤茶けた日のいろだの、掛け机とならんでおいてあつた杉浦には不似合と思ふひともあるかも知れないやさしいデザインの坐り机、そのそばで早口に言いあいをしている色の黒い長身の立原と色白で背の低い杉浦の姿が浮び、その声まで聞えて来るような氣がする。僕は少し離れた床の間の前に黒い学生服のズボン

穿いた脚を投げ出し、忘れられた操り人形のように坐っている。僕はこれらのやりとりを耳にしながら、自分自身と対話していたのであった。僕は疎隔を感じていた。何から？ 立原や、杉浦のように僕は感情表現の専門家ではないというようなことを思っていたのだろう。やさしい、繊細な、軟かな感情を表現する詩的な口舌の技術がかれらにはあつて、それがかれらのみずからを感性上の貴族とするための楯に、つまり紋章になっていた、と言つては誇張にすぎないだろうか。いずれにせよ、僕はかれらではないまでも、かれらのひとり、立原を傷つける役しか演じない、田舎侍のようなものであつた。『青猫』の優雅をむねとする憂鬱な抒情には真実には親しみえず、『氷島』の激越直截な、悲憤の調子には巻をひらくより心を奪われるというのは、田舎侍だからであらうか。

そうではない、と僕自身は言いたいのだ。朔太郎が詩人として思惟するひとで真にありえたのはこの詩集においてではなかつたらうか。そしてかれはこの詩集ではじめて、かれが

ありとあらゆる官能のよろこびとそのなやみと、

ありとあらゆる近代の思想とその感情と

およそありとあらゆる「人間的なるもの」のいつさい

があると信じた都会（遺稿大正六年六月作『都会と田舎』と、他方蕭殺荒寥とした自然と貧困不活潑な人間のほか何ものもないかのごとく思われた田舎とのあいだの彷徨往還をやめて、かれ自身に、上州人らしいかれ自身になったのではなからうか。しかもそれは、自他ともにかれのうちにあると感づいていなかったとはけして言えないか

れ自身にもどつたこと、かれの第一詩集『月に吠える』に収められた諸篇よりもっと古い詩篇がしめすところのものにかれがもどつたことなのではなからうか。大正二年晩夏、

きのふまた身を投げんと思ひて
利根川のほとりをさまよひしが、
水の流ればやくして
わがなげきせきとむるすべもなければ
おめおめと生きながらへて
今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。

と歌つたその場所に帰ることを夢見ての歌ではなかつたのか、

ああ汝 漂泊者！

過去より來りて未來を過ぎ

久遠の郷愁を追ひ行くもの。

という自分自身への呼びかけを持つ『漂泊者の歌』は。

ああ汝 寂寥の人

悲しき落日の坂を登りて

意志なき断崖を漂泊ひ行けど

いづこに家郷はあらざるべし。

汝の家郷はあらざるべし！

「家郷はあらざるべし！」というこの絶望的な断定が、家郷を持ったこともなく、持たないことを悲しめない心での叫びであろうとは誰に考えられよう。「家郷はあらざるべし！」という言葉の投げつけるような調子は、家郷をしのんでやまない自分の心に投げつける礫の音に似ている。のみならず「いづこに」という歌い出しは、最初から否定を現しているわけではない。「いづこにかあらん！」というやがて否定され悲歎となる存在への期待を示している……

「昭和四年の冬、妻と離別し二児を抱へて故郷に帰る」といふ詞書きのある詩篇『帰郷』の、

まだ上州の山は見えずや。

という一句は、そのあとに、

嗚呼また都を逃れ来て

何所の家郷に行かんとするぞ。

過去は寂寥の谷に連り

未来は絶望の岸に向へり。

砂礫のごとき人生かな！

……………

いかんぞ故郷に独り帰り

さびしくまた利根川の岸に立たんや。

汽車は曠野を走り行き

自然の荒寥たる意志の彼岸に

人の憤怒を烈しくせり。

という慷慨の調子に伴われていて、けしてなごんだ心で言われているのではないことは言うを用いないが、しかしそれは傷つき脚萎え眼くらんだ戦士が、車にのせられて故郷に運ばれる途中で、折れた剣をついて身をもたげて言うにふさわしい一句なのだ。

いかんぞ故郷に独り帰り

さびしくまた利根川の岸に立たんや。

まさに立つのである、利根川の岸に。あの、十六七年前、身を投げようとしてさまよった利根川のほとりに。「いかんぞ」と言ふ起句はさきの「いづこに」同様、ねじまげられた使いざまで置かれており、反語的機能を揮いうるものではない。結句の「や」とともにそれは、肯定の強調の役をするだけである。そのふたつの語のあいだにはさまれている事柄は今はいかんともしがたく、腕をこまぬいて待つほかない、いなむしろ列車の座席に坐してみずからそれに飛びついて行く既定の事実なのだ。だから詩人は、いわば家郷の延長である「曠野」、「荒寥たる意志」を抱く「自然」、現に自分の疾走している場所を、自分とは目に見えぬ亀裂によってへだてられているものと感じ、その亀裂の「彼岸」むしろ「此岸」で、「憤怒を烈しく」するのである。しかもその「憤怒」は、汽車をとどめえず、自分がかの赤貧鈍重俗悪残酷な利根河畔に戻りつつある事実をも拒みえないのである。

これこそ宿命の自覚をこえて、その把握であり、かつて陰鬱な「冬の日々」のさびしい輪廻にその心象を見た「地獄の鬼がまはす車」をひたために視ることに他ならなかったのではなからうか。「い

かんぞ」と反問の気魄を示しても、それ以外に起りうべき事態はないのだ。

昭和七年の『新年』にかれはこう歌う。

道路みな霜に凍りて

冬の凜烈たる寒気の中

地球はその週曆を新たにするか。

われは尚悔いて恨みず

百度もまた昨日の弾効を新たにせむ。

それより早く昭和三年『青猫以後』の序文に「進歩はどこにもない。実にあるのはただ変化のみ。」としるし、生命には変化あつて、成長はないと主張したのはかれである。かれにとっては繰り返しかえしすら、あえて言えば、生命のしるしでなかったとは言えないだろう。なんら事態の変化を招来しない弾効を、きのうしたように、きょうもし、あずもすることは、いわばかれの未来なのだ。

従つて利根川のほとりに帰ることも、またあす東京に出て来ることもと等価の、流転の一局面にすぎないかも知れない。事実『氷島』の新刊当時、杉浦は、今月号の雑誌「文学」にも書いているように、「マルクス主義者ではぜんぜんなく、だらしない文学青年にすぎなかつた」かも知れないが、進歩を信ずる「向日性」の魂の持ち主として、同じ『新年』の中の次のレトリックを理解できないと言つたものである。

いかなれば虚無の時空に

新しき弁証の非有を知らんや。

およそ進歩があるためには、即自と対自の対立、抗争と止揚というディアレクチックの形式は、不変でなければならぬだろう。ただこの形式に盛られる事実、弁証の項の内容が、歴史的に進化して行く。それだけのことで、次の段階を新しい弁証の形式が律することとは、前代後代との比較を不可能にし、進歩の概念の成立をさまたげるだろう。

だからこそ杉浦には、正當に、このレトリックが分らなかつたのである。僕もまた当時これを理解したり、正しく解釈したりしてはいしなかつたが、今になってみて、杉浦が今これを擯けるであらうようには、僕はこれを擯けず、恐らく杉浦より共感をこめてその意味、乃至言いあらわし方を、解決する立場にいはしなかつたらうかと思う。

朔太郎にとって現世は、自然界も人間界も、それがなんらかれを救い、慰め、明日への活力を賦与してくれるものでないという点で、また「我れ既に生活して、長く疲れたれども、軍務の帰すべき港を知らず。暗憺として碇泊し、心みな錆びて牡蠣に食はれたり」(『氷島詩篇小解』)と観艦式のと、品川沖を眺めやつて慨歎せざるを得ぬ地点にかれを追ひ込んでいるという事実において、「虚無」以外ではなかつたのだ。それは与えず、励まされぬものであつた。「新しき弁証の有」に、進歩や成長や安泰の概念を打ちくだくものには、はかなくも熱烈な望みをかけることしか、そこには生きのびる可能性がない。「昨日の弾効」「昨日の悔恨」を新たにするあいだに「新しき弁証」の發生を期待することはできなからうか。つまり、かれ